

吉井源太と明治

《6》

農学校教壇に立つ

吉井源太が仕事の集大成といえる「日本製紙論」を出版したのは、亡くなる約十年前の明治三十一年（一八九八）年三月のことだ。同書を手掛かりに、その仕事を振り返りたい。

源太は、新しい紙の製造方法などを色々開発した。紙を漉く人に大変役立つ、そうした製造方法などについて、源太が書いておくべきだと考えた人がいた。高知県簡易農学校の校長で農学士の沢村真だった。同書はこの人の勧めでできたものだ。

源太は、同二十九（一八九六）年末から翌春にかけて、同農学校で和紙製造の実習を受け持った。

文部省は同二十七（一八九四）年に「簡易農学校規程」を定めた。同農学校

は、これによって作られた。明治政府は、子どもに對しての産業教育を重視しており、そのために徒弟学校や簡易農学校などが作られたのだ。

このころの小学校は、六歳から十歳までが通う尋常小学校と、卒業後に希望者が行く十四歳までの高等小学校があった。

徒弟学校は、尋常小学校卒業者のために、職工になるのに必要な科目を教えるものだ。科目は、修身や算術など基礎的なものと、職業に直接関わる科目や実習だった。

源太が教えた同農学校は、簡易な方法で農事教育を行う学校で、農閑期の時期にのみ開かれた。十四歳以上が対象で、科目は、算術や物理のほか、農業に関

する科目が幅広く教えられる。地方の状況によって組み合わせたり、農業以外を教えるもよくなっていた。場所は日記には書かれていないが、筆山の西にあっ

たのではないか、という話を高知の人から聞いた。源太はここで、若い生徒たちに土佐和紙の製造方法を一から実習した。日記によると、一年生から三年生

まで一クラスずつで、いずれも十数人だったようだ。女子らしい名前も少しずつある。「日本製紙論」は、このように生徒を教えるかたわら、まとめられた。

源太は農学校勤務の間この沢村校長から化学的な知識を教えてもらって、大変尊敬していたようだ。また、この農学校には本を作るのにふさわしい協力者があった。「日本製紙論」は、「吉井源太翁口述平山晴海編輯」となっている。畜産関係の教師として農学校に勤務していた平山晴海という人だ。年末年始にもかかわらず、源太は平山と二人で熱心に調べ物をしていく様子が、日記には記されている。この結果、内容の充実した本ができあがったのだ。

源太が教えた同農学校は、簡易な方法で農事教育を行う学校で、農閑期の時期にのみ開かれた。十四歳以上が対象で、科目は、算術や物理のほか、農業に関

る科目が幅広く教えられる。地方の状況によって組み合わせたり、農業以外を教えるもよくなっていた。場所は日記には書かれていないが、筆山の西にあっ

たのではないか、という話を高知の人から聞いた。源太はここで、若い生徒たちに土佐和紙の製造方法を一から実習した。日記によると、一年生から三年生

まで一クラスずつで、いずれも十数人だったようだ。女子らしい名前も少しずつある。「日本製紙論」は、このように生徒を教えるかたわら、まとめられた。

源太が教えた同農学校は、簡易な方法で農事教育を行う学校で、農閑期の時期にのみ開かれた。十四歳以上が対象で、科目は、算術や物理のほか、農業に関

る科目が幅広く教えられる。地方の状況によって組み合わせたり、農業以外を教えるもよくなっていた。場所は日記には書かれていないが、筆山の西にあっ

たのではないか、という話を高知の人から聞いた。源太はここで、若い生徒たちに土佐和紙の製造方法を一から実習した。日記によると、一年生から三年生

まで一クラスずつで、いずれも十数人だったようだ。女子らしい名前も少しずつある。「日本製紙論」は、このように生徒を教えるかたわら、まとめられた。



典具紙などの製法を解説している「日本製紙論」復刻本より、（いの町紙の博物館蔵）

沢村校長は、紙を漉くときに混ぜて原料を分散させる、製紙ノリの腐敗に関す

る化学的研究や発表をしていた農業化学関係の研究者だった。

（京大大学院研修員、京都府在住）